

平成 29 年度前期終業式（平成 29 年 9 月 20 日）

こんにちは。今日は附中七箇条の一つ、「聞く」について考えて見たいと思います。「きく」には「もん」と読む「聞く」と、「ちょう」と読む「聴く」と、「じん」と読む、尋ねるという意味の「訊く」がありますが、今日は「聞」と「聴」について考えて見ましょう。それでは「聞く」と「聴く」の違いは何でしょうか。周りの人と話し合ってみてください。意見のある人は手を挙げてください。

生徒：「もん」の方の「聞く」は受け身です。それに対して「ちょう」の方の「聴く」は相手に体を向けて自分から聞くことです。

なるほど。確かに「ちょう」の方の「聴く」は漢字の成り立ちからしてそういう意味があるそうですね。「耳」と「直」と「心」から成っています。耳でまっすぐに相手に心を向ける、ということです。こちらから聴きに行く、主体的能動的な聞き方です。「もん」の方の「聞く」が受け身で、「ちょう」の方の「聴く」が主体的だということになれば、「ちょう」の方の「聴く」の方がレベルが上のように思われます。どうでしょう。「ちょう」の方の「聴く」の方がレベルが上だと思う人、手を挙げてください。

（ほぼ全員が手を挙げる）

はい。そうではないと思う人。意見ありませんか。勇気をもって発言してみてください。

いませんか。それでは私の方から反論。「ちょう」の方の「聴く」は「ゆきて聴く」ですから、自分が主体です。だから自分に都合のいいこと、興味のあること、必要なことしか聴きません。皆さんが私の話の中で必ず聴いていることは何だと思いますか。それはこの話が「終業式の校長の話」だということです。ここは必ず聴き取っている。でないとうろたえていいかわからない。これは話の内容に対して外枠をなすものです。人間は話を聴く時、先ずこの外枠を聴く。このような外枠には例えば「話している人」があります。話している人が自分の尊敬する人だったら、どんな内容でもありがたいものになります。好きな人だったら好感を持ちますし、嫌いな人だったら反感を持ちます。内容に関係なく、です。内容を聴く場合でも自分の考えと同じか違うかの方に興味が向きます。これらは話の内容に対しては外枠を形成しています。人間は話を「聴きに行く」場合には大抵こうした聴き方をしています。こうした聴き方ではどれほど知識を獲得しても自分の思いを出ることがありません

これに対し「もん」の方の「聞く」は自分の思いが破れた所で聞こえて来る、という意味があります。思わず聞こえて来る、思いが破られ、心に響く。これが感動ですね。この「聞く」は受け身です。自分から「聞こう」と思っても聞けません。感動は一種の驚きですが、自分から驚こうと思っても驚けないように、自分から感動しようと思ってもできません。

皆さんは松尾芭蕉に「古池や 蛙飛びこむ 水の音」という句があるのをご存知ですね。この場合私たちは何を聞いているのでしょうか。ちょっと考えると「ぽちゃん」という「水の音」ですね。でもそれだけでしょいか。「ぽちゃん」という小さな水の音が消えて行くところに「静かさ」「静けさ」が聞こえませんか。これは聞こえて来たんですね。人間というものはいつもあれやこれやとぐちゃぐちゃ考えています。そうした人間の思いが「ぽちゃん」という小さな水の音で破られて、そこに「静けさ」が聞こえて来る。その「静けさ」は実は始めから私たちに届いていたんです。そこに驚きと感動がある。

静けさと同じように、どこまでも分からない人間の深みはいつも私たちに届いています。ですが人間は自分の力では自分の思いを一歩も出ることができない。だからこそそうした思いが破れ、人間の深みに触れるということが人間に起こり得るのです。そこに「聞こえてくる」ということが起こる。ですが人間はそれをも「聴いて」しまう。分かった気になってしまう。ですが「聞こえて来る」という経験をするによって「聴き方」も変わってきます。聴く際の興味関心も深まっていきます。

今日は附中七箇条の中の「聞く」について哲学しました。終わります。